

独居・キーパーソンが非血縁者である症例の支援について

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎腎クリニック

○藤原久子 林田めぐみ 戸村秀志 山口貢正 北村峰昭 河津多代 澤瀬健次 橋口純一郎 原田孝司
船越 哲

【はじめに】

近年生活の多様性ととも、独身・独居が増える傾向にある。そのためかキーパーソンが非血縁者であるという症例も時折経験する。今回キーパーソンが非血縁者であったが、支障なく患者支援及び看取りができた 2 症例を報告、考察したい。

【症例提示】

症例 1:51 歳男性、独居、2015 透析導入。両親は幼少期離婚、父方で育つ。社会に出てからは社会適応ができず、車上生活、精神科介入、生活保護受給の後に透析導入に至った。当院転入時、遠方に住む高齢の父親と友人がいたが、役割分担はできておらず、MSW 介入にて役割の分担を支援し、非血縁者の友人をキーパーソンとし、患者の看取りへとつなげた。

症例 2:74 歳女性、独居、2017 透析導入。離婚歴あり、その後就労するも、老後は生活保護受給。当院転入時友人が身の回りの面倒をみていたが、その他はなかった。身内からはキーパーソンの選出が不能で、MSW が介入して非血縁者の友人をキーパーソンとし、患者の看取りにつなげた。

【考察・まとめ】

キーパーソンが非血縁者である場合は、患者、医療機関、非血縁者の友人、血縁者が役割分担を明確化し、情報共有する事が重要である。今後はキーパーソンが非血縁者である症例は増加することが予測され、成年後見人制度も積極的にも取り入れる事も重要と考える。